



若義母と熟伯母

盪惑な蜜約

芳川葵

挿絵／英田舞

立ち読み版



第一章	ママと僕の甘い約束	4
第二章	熟伯母と秘密の混浴体験	57
第三章	ママとラブホテル	109
第四章	南の楽園 ビキニママとの初エッチ	160
第五章	明かされた蜜約 若義母・熟伯母の姦計	208
エピローグ		273

登場人物

Characters

西久保 亘

(にしくぼわたる)

ごく普通の高校一年生。真面目な性格だが、玲奈の豊満な身体が気になっている。

西久保 玲奈

(にしくぼれいな)

母性的でおっとりした性格。再婚した亘の父親を七年前に事故で亡くし、現在は義理の息子の亘と二人暮らし。

西久保 志乃

(にしくぼしの)

亘の伯母。熟女ならではの色気を纏っている。幼い頃に実母を亡くした亘を実子同然に可愛がっている。



舌を這わせても、次々と淫唇の奥から滲み出てくる淫汁に、恍惚感を抱きつつ、巨は飽きることなく秘唇を舐めあげつつつけた。

「ピチャッ、チュッ、ペロ、ピチャぴちゃ……」

「はうん、いい、上手よ、巨くん」

技巧もなにもなく、単調に舐めあげているだけにもかかわらず、志乃の口からは甘い言葉が紡がれてきた。

（伯母さん、感じてくれてるんだ。僕が伯母さんを、感じさせてるんだ）

感動が全身を伝わった。腰骨は妖しくくねり、完全勃起のペニスが大ビクンッと胴震いを起こした。先走りか、ネットリと鈴口に浮かんでできてしまう。それでも巨は、一心に志乃の濡れたスリットに舌を這わせつつつけた。

「あんッ、ねえ、今度はあそこの一番上のところにあるポッチを、舐めて」

「一番上のポッチ？」

「さつき巨くんが指で悪戯してきたところよ。そこが一番感じるの。だから……」

口の周りを唾液と淫蜜まみれにした巨が、伯母を見上げると、志乃の顔は淫らなまでに上気しており、その声には一層の媚が含まれていた。

「わ、分かった」

亘は興奮で上ずった声で返事をし、言われた通りに、志乃の秘唇の合わせ目に舌を這わせていった。コリッとした突起が舌先に当たってくる。

「はうッ、あつ、あぁんッ！」

それまでとは比較にならないほど盛大に志乃の腰が跳ねた。浴室内に伯母の嬌声がこだまする。

（さつき指で触ったときには分からなかったけど、クリトリスって、結構大きいんだな。それに、こんなにコリコリして。ママにも、いつかママのあそこもこうやって舐めてみたい。ああ、ママ）

「チュッ、ちゅぷっ、ジュチュッ、ぢゅるうん……」

亘は玲奈の淫唇を舐めているつもりになっていた。舌先を震わせて、屹立した突起物に重点的な刺激を加えていく。そのたびに志乃の腰が跳ね、言葉にならないうめきを発しつづける。

「はっ、くうん、あぁん、もうダメ。亘くん、お願い」

「伯母さん？」

荒い息の下で志乃はそう言いながら、亘の頭を両手で掴み、股間から無理やり引き離した。亘は怪訝な表情で熟伯母を見上げて言った。なにか気に障るようなことをし

てしまったのだろうか、という不安がよぎる。

「巨くんが上手すぎて、もうたまらないの。だから今度は、巨くんのオチンチンで」
「えっ！　そ、それって、まさか……」

（セックス？　でも、そんなことまで本当に？）

志乃の言葉に、巨は驚愕の表情を浮かべた。確かに伯母は淫裂を触らせてくれたとき、それ以上のことも匂わせてはいた。だが実際に経験ができそうな事態を前にして、緊張と興奮、そして相手が伯母である事実、すべてがない交ぜとなつて、巨の全身を駆け巡つた。同時に、玲奈の顔が脳裏をよぎってくる。

（もしここで伯母さんとセックスしちやったら、手やお口で抜いてくれるって約束してくれたママを裏切ることに……。でも、ママは絶対にセックスはダメっていう立場だし、だったら伯母さんと……。せつかく誘ってくれているんだから）

玲奈への愛情と、年頃の少年としての欲望のぶつかり合いだ。

「ええ、そのまさかよ。言つたでしょう、もつと凄いいことだつてさせてあげるって。巨くんはもう誰かと経験しちやってるの？」

巨の葛藤を打ち砕くほどの、悩ましく上気した顔に凄艶な笑みを浮かべた志乃が見下ろしてきた。その瞬間、ゾクゾクツツという震えが背中を駆けのぼつた。

「そんな、まさか、全然ないよ。女の人のあそこ触ったのも、初めてなんだもん」

「亘くんの童貞、伯母さんにくれる？」

「は、はい」

快感中枢を揺さぶってくる、志乃の艶めかしい声音に、亘は無条件に頷いていた。

（ああ、ママ、ごめん。でも僕、どうしても経験したいんだ）

「うふふつ、ありがとう。うんと気持ちよくしてあげるわね」

伯母は艶っぽさと優しさの同居した顔で亘を見つめると、風呂椅子から立ちあがった。亘は正座をしたまま、そんな熟伯母の姿を恍惚の顔で見上げていく。

「さあ、あなたも立ってちょうだい」

「えっ、あつ、う、うん」

「そんなに慌てなくても大丈夫よ。伯母さんがちゃんとしてあげるから」

慌てて立ちあがった亘に、志乃が優しく声をかけてくれた。しかし、ぎこちなく頷くのが精一杯だった。伯母の顔も、いくぶん緊張しているように見える。

（本当に僕、伯母さんと、は、初体験を……）

伯母を相手の初体験。母性的でありながらも色っぽい志乃の、義母とは違う色気に惹かれていたのも事実であり、脱童貞の相手としては理想的と言えなくもない。

「忘れられない、初体験にしてあげるわね」

緊張で震えそうになっている甥に志乃は艶然と微笑むと、亘の横を通り、再び浴槽へと足を向けていった。そのまま湯船に足を入れていく。

突然の伯母の行動に、どうすればいいのか分からない亘は、ただ成り行きを見守るしかなかった。浴槽の先にあるガラス窓には、下腹部に貼りつきそうなペニスを抱えた亘と、お椀形の豊乳を揺らす伯母の姿が、はつきりと映りこんでいる。

志乃は湯船に身を沈めることなく、ガラス窓に向かって浴槽内を歩いて行く。窓の前まで移動すると、肩幅程度に脚を開き両手をガラス窓についた。そして、ボリューム満点の双臀を後ろに突き出すようにしてきた。

「さあ、亘くん、なにしてるの。こっちへいらっしやい」

顔を後ろに振り向けてきた伯母が、蠱惑的な笑みで頷いてくる。

「う、うん」

緊張に震えそうになる足に力をこめ、亘も浴槽に足を浸していった。ザブザブと音を立てながら、志乃の側に歩み寄っていく。すると、薄褐色の淫裂が、卑猥に口を開いている様子が、まともに目に飛びこんできた。

割れ目の周囲は先ほどまで舐めていたこともあり、唾液と蜜液が混ざり合い、電球

の明かりに反射してキラキラと光っている。秘唇を眺めているだけで、亘の心臓はその鼓動を速めていく。自然と息が荒くなり、息苦しさをさえも感じはじめた。

（もうすぐだ。もうすぐ伯母さんのオマ○コに、僕のが……）

そう思っただけでペニスに敏感に反応し、震えてしまった。志乃のクレバスを眺めているだけで、射精してしまいそうである。

「さあ、亘くん、来て」

顔を後ろにねじ曲げた志乃が、開かれた股間の間から右手を突き出してきた。

「うん」

心臓の高鳴りを感じつつ、亘は湯の中を伯母の秘唇へと歩を進めていく。

「もうちょっと、前へ」

志乃の言葉に押されるように、また一步、伯母に近づく。すると、のばされた熟女の右手が、下腹部に貼りつきそうになっている強張りを握り締めてきた。

「くはッ、あつ、くうう……」

鋭い快感が、一瞬にして全身を駆け巡り、亘は身をくねらせた。気を抜けばその瞬間にマグマの噴出に至ってしまいそうである。

「はぁん、すっごく元気ね、亘くんのオチンチン」

志乃はペニスの感触を確かめるように何度か握り方を変えつつ、鼻にかかった甘い声で囁いてきた。ペニスを握り直されることに襲ってくる断続的な快感と、その艶かしい声が、巨の興奮をさらに煽る。

「おっ、伯母さん、僕、もう……」

「もうすぐ、もうすぐよ」

志乃は諭すように言うと、硬直を卑猥に口を開けた淫裂へと、引き寄せていった。(もうすぐ、もうすぐ僕のが伯母さんのオマ○コに……。はっ、初、体験、できる)

緊張が一気に高まってくる。盛大な音を立てて唾を飲みこんだ。巨の目には、クレバスから流れ出た蜜液が、ムチムチの太腿を垂れ落ちていくさまが、はつきりと見えていた。やがて亀頭の先端にヌルツとした感触を覚え、背筋に鋭い快感の波が襲う。本能的にそれがなにあるか、自分のペニスが志乃のどこに触れたのかを知ったのだ。

(伯母さんのオマ○コに、ぼっ、僕のが！)

「伯母さん！」

「ううん、いいわよ。このまま腰を突き出すようにしてちょうだい。そうすれば、巨くんのおチンチン、伯母さんの膣中に入ってこられるわ」

「う、うん」

志乃の言葉に頷くと、亘は恐るおそる腰を突き出していった。亀頭の先が伯母の肉洞に押し入ると、いままで感じたことのない快感が鋭く全身を駆け巡っていく。淫壺に埋まった亀頭には、すぐさまウネウネと蠢く柔褻が妖しく絡みついてきた。

「くっ！」

亘の口から声にならないうめきが漏れる。気を抜いたら最後、根元まで挿入を果たす前に呆気なく射精してしまえそうだ。

「あんっ、そ、そのまま、そのまま奥まで挿れてちょうだい」

艶かしい伯母の声が浴室内に反響していた。尻穴を締め、奥歯をさらに噛み締め、腰を一気に突き入れた。

ブジュツとくぐもった音を残して、ペニスが熟伯母の肉洞に侵攻していく。その瞬間、目の前に色とりどりの光が乱舞した。優しくまとわりつく熟褻が、ペニスを甘く掬め捕り、奥へ奥へと強張りを誘いこみ、ついには根本まで蜜壺に嵌まった。

「あッ、はあんッ」

とてつもなく熱く甘い吐息が、亘の快感中枢に届けられてきた。

「くはッ、ぐうう、おお、入ったんだね。伯母さんの中に僕……」

「あうん、そうよ、亘くん。あなたの逞しいのが、伯母さんの中を満たしてるわ」

「ああ、伯母さん」

亘は腰から下が溶け出してしまふのではないか、と思うくらい快感の中にいた。志乃の淫壺は適度な締めつけと、柔らかな肉壁がペニスを包みこむように蠢き、確実に絶頂へと誘ってくる。

「動いて、いいのよ。いっぱいこすりつけて、うんと気持ちよくなってちょうだい」

志乃の声に促され、亘はぎこちなく腰を動かしはじめた。初めてのセックス、それもガラス窓に両手をついた伯母を後ろから貫く体勢ということもあり、どうしてもおつかなビックリな動きになってしまう。

クチュツ、びぢゅつ、ズチャツ……。

湿った淫音が脳髓を蕩けさせてくる。腰を動かせば、それだけ蠢く肉壁で肉竿や亀頭を扱きあげられることとなり、突き抜けるような悦楽が脳天に突き抜けていく。

「くふっ、おう、ああ……」

言葉にならないうめきが、亘の口から漏れつづけた。霞みそうになる瞳をガラス窓に向けると、そこには完全に快感の虜となっている自身の顔が映りこんでいた。

（ああ、僕、お風呂で、それもガラス張りの展望風呂で伯母さんと、セックス、してるんだ。夜だし、周りに高い建物もないから、誰かに見られることはないだろうけど、

それでも、くうう、もしもを考えると、一層、興奮しちゃう)

ゾクッと背筋を震わせ、視線を伯母の顔に向けた。ガラス越しに見る熟伯母の瞳は閉じられているものの、眉間には悩ましい悶え皺が寄っており、志乃も感じてくれていることを伝えてくる。半開きの朱唇からこぼれ落ちる吐息がガラスにぶつかると、窓のその部分だけが一瞬白くなっていく。

「はうん、うん、素敵よ、悟。悟の大きいのがママの膣中に、ママ、感じちゃう」

その言葉が耳朶じだを打った瞬間、亘は迫りあがっていた射精感が遠のくのを感じた。

(えっ、悟って、まさか伯母さん、悟くんとしているつもりで……。だから、目を閉じてるのか。窓に映った僕の顔を見ないように……)

せつかくの初体験。童貞喪失という貴重な体験なのに、伯母は甥の亘ではなく、亡くなった息子に抱かれたつもりになっている。その事実にも、全身には衝撃が走った。

(だったら僕もママと、大好きなママとしているつもりになって……)

いまさらペニスを引き抜くことなど考えられない。伯母が従兄を想っているとしてみても、志乃の膣褻が扱きあげているのは、亘の童貞ペニスなのだ。ならば自分も、伯母に硬直を突き立てながら、最愛の義母を想像しても問題はない。そう考えた亘は、腰の前後動を一層速めていった。ポリウム満点の双臀に、腰を叩きつけていく。

ぶぢゅつ、グジュツ、ズチャツ、ぢゅぽつ……。

淫猥な摩擦音が大きくなる。同時に腰が伯母の熟尻にぶつかるたびに、パンツ、パンツと乾いた接触音があがった。ペニスが根本まで押しこまれると、歡喜をあらわすように志乃の尻肉が波打つ。その視覚情報が、亘の射精感を盛り返してくる。

「うほつ、ああ、マ、ママ、気持ちいいよ」

「ママも、ママも感じちやうわ、あんう、悟、悟ちゃん、くうん」

「くはッ、ママの中、急に締めまりが強くなった」

亘が「ママ」と呼んだことで、伯母はますます悟に抱かれている気分が高まったのだろう。優しく包みこんできていた淫壺が、その締めつけを強めてきていた。

「いいからよ、あなたのオチンチンが素敵だから、ママも感じちやうのよ」

目をつぶったままの志乃が、悩ましく腰を左右に振り、艶かしい喘ぎを漏らす。

（伯母さんが本当に感じてくれる……。ああ、もし、本当にママとエッチできたら……。ママ、したいよ。僕、やっぱりママとセックスがしたい）

伯母が本格的に快感を覚えはじめていることに、亘は嬉しさと同時に悔しさも味わっていた。その悔しさをぶつけるように、より激しい律動を繰り返していった。

パンツ、パンツと腰が熟尻に当たる音が大きくなり、それに合わせて柔らかヒップ

が悩ましくひしゃげながらより一層、波立つ。同時に、量感を増した熟乳がぶるん、ぶるんと妖しく揺れ動く様子が、ガラス窓に映りこんでいた。

（おっぱい、ママのオッパイ）

亘はウットリとした眼差しで、腰にあてがっていた両手のうち、右手を志乃の腋の下から向こうにまわし、タプタプと揺れている豊満な乳房を驚掴みにしていった。

「くほッ、ああ、すっごい、ママのオッパイ、ほんとに柔らかくて、気持ちいい」
手の平からこぼれ落ちるポリウムと、得も言われぬ柔らかさに、恍惚の眩きが自然とこぼれてしまう。脳内では、前夜たっぷりと甘えさせてもらった、玲奈の美爆乳の感触が甦ってきていた。

志乃が両手をガラス窓につきヒップを後ろに突き出している体勢のため、重力に引かれた双乳の重量感が、若母の乳房に負けないポリウムを演出している。そのため亘は、ほとんど違和感なく義母の膨らみを重ね合わせることができた。

「あんッ、遠慮は要らないのよ。両手で好きなだけ、揉みモミしてちょうだい。ママのオッパイは、悟ちゃんのものよ。パパでも、敏也でもない、悟ちゃんだけの」

「ああ、ママ……」

亘はうわ言のように呟くと、志乃の背中に身体を預けた。左手も腋の下から向こう

にまわし巨大な乳房に被せる。量感と柔らかさを堪能するように揉みこんでいった。熟した果実が、指の間からこぼれ落ちていく。

右の手の平に感じる乳首は、ピンツツと尖っていた。巨は膨らみを掬いあげるように揉みながら、親指と人差し指で突起を摘み、紙縫りを作るように捏ねまわした。

「あぁん。ダメ、そんな乳首、悪戯したら、はうん、ママ、もつと感じちゃううう」

志乃の全身がビクツツと震えたのが、巨にも分かった。それに連動するように、蜜壺がキュンとさらに締まる。蠢く熟襲による扱きあげも、強烈になってきていた。

「うはッ、ママのおマ○コ、くうう、急に締めまりが、強くなってきたよ」

「あんッ、悟ちゃんのおチンチンが、とつても気持ちいいから、ママの膣中が悦んでるのよ。はんツツ、もつと、もつと激しく突いて。オッパイ揉みながら、もつと激しく」
「おぉお、マッ、ママあぁあッ！」

眉間に悶え皺を寄せた志乃の甘美で淫らな言葉に、腰骨がブルツと大きく震えた。妖しく絡みつく柔襲を押しやるように、ペニスが一段と成長し、睾丸が根本方向へと押しあがってくる。眼窩には悦楽の火花が飛び交い、射精衝動が突きあがった。

ズチャッ、グチュツ、グチヨツ……。襲い来る射精感に抗いながら、巨はラストスパートをかけるように、強張りて熟襲を抉りこんでいった。



「亘がママのオッパイを気に入ってくれてたから、ネットで調べたのよ」
「そんなことまで……。ああ、ママ！」

義母の言葉ひとつひとつが、脳髓を揺さぶってくる。感に堪えなくなった亘は、またしても両手をのぼし、玲奈を抱き締めてしまった。先ほどとは違い、生の乳房が惜しげもなく胸板を圧迫し、射精衝動を募らせる愉悦に腰が震えた。義母のなめらかな下腹部との接触で強張りが跳ねあがり、亀頭裏が絹肌でこすりあげられる。

「あん、亘。やあん、すつごい熱いのが、ママのお腹に……。うん、ダメよ、そんな、グリグリしないでえ」

（ああ、ほんとにママの身体って柔らかくて、気持ちよくて、もう最高だ）

艶めいた玲奈の声に背筋を震わせつつ、最愛の義母の身体を抱き締めつづけた。

「ほら。いつまでもそうしてたら、いつになってもオッパイでしてあげられないわ」
「う、うん」

義母の柔肌の温もりと感触に陶然としてみると、玲奈が後頭部を優しく撫でつけながら、耳元で甘く囁いてきた。恍惚とした表情を浮かべたまま、両腕の力を抜き、後ろに一歩さがって義母との距離を取っていく。

「うふっ、ほんとにいい子ね。じゃあ早速してあげるけど、まずはこれ、ママのオッ

パイに塗ってちょうだい」

玲奈はそう言うと、ベッドのヘッドボード脇に備え付けられていた収納棚を開け、一本のボトルを差し出してきた。

「なに、これ？」

五百ミリのペットボトルとほぼ同じ大きさの、半透明のプラスチックボトル。ラベルには「ローション」の文字があり、濃厚タイプで肌馴染みもいと書かれていた。「最初にそれを、オッパイの谷間に塗って欲しいの。そうすると、すべりがよくなつて一層、気持ちよくなれるんですって」

「僕が、ママのオッパイの谷間に、これを……。ゴクッ」

「もう、そんな緊張することないじゃない。ママのオッパイなんて、もう触り慣れちゃってるでしょう？」

「そんなこと、ないよ。ママのオッパイは、いつ触っても凄く興奮するし、慣れることなんて、絶対にはないと思う。それくらい、素敵なんだ」

「ありがとう。じゃあ、塗ってちょうだい。そうしたら、今度はママが、ねッ」

玲奈は一瞬、母の優しさをたたえた表情を浮かべると、すぐに悩ましい微笑みとともに豊乳を差し出してきた。

「うん」

「巨はかすれ声で頷き、ボトルのキャップを外した。左手の平に向かつて、中身を絞り出していく。ローションと書かれていた割には、出てきたのはゼリー状のプルプルとした半固形物である。」

「それくらいで、いいんじゃない。あとは両手でこすり合わせて、塗ってくれば」
「そ、そうだね」

義母も初めてのことと緊張しているのか、どこか自信がなさそうな声をかけてきたのに対して、「巨も緊張の色を浮かべた表情で頷くと、キャップを嵌め直し、ボトルを玲奈へと返していった。左の手の平に右手を重ね合わせ、こすり合わせていく。すると、瞬く間にゼリー状の物体が液状に変化した。」

「じゃあ、ママ、塗らせてもらおうよ」

「ええ、お願い」

「頷く若母に頷き返し、両手を砲弾状の膨らみへとのばしていく。ムニュッと、指先が弾力溢れる膨らみに押し返される。ついいつもの癖で、手の平では収まりきらなかったわな膨らみを捏ねあげてしまった。」

「あんっ、谷間よ。全体じゃなくって、谷間に塗ってくれないと、意味ないわ」

「そうだったね、ごめん。ママのオッパイ、本当に素敵だから、僕、つい」

「いいのよ。ママのオッパイは巨のためだけの膨らみなんだから、好きなだけ揉んでくれていいの。でもいまは、谷間のすべりをよくしなくちゃ」

「甘く優しい義母の言葉に、巨は胸を熱くしながら、左手を右乳房の外側に這わせ、右手を谷間に挟みこむようにしていった。

「うわッ、すっごく気持ちいい。温かくて、柔らかくて、ここにチンチンを挟んだら、絶対に気持ちいいよ」

豊かな乳肉にサンドイッチされる形となった右手には、それまで感じたことのない感触が襲いかかってくる。ピンクの花が早くも数輪、脳内で咲いてしまっそうだ。下腹部に貼りつきそうなペニスが震え、先走りの粘液が滲み出してしまっ

恍惚となりながらも、谷間に挟んだ右手を上下に動かし、手の平のローションを乳肉に塗りこんでいく。三桁に近い豊かさだけに、挟みこんだ手を動かしても、乳肉の布団から手が出てしまうこともない。しばらくすると、ローションを塗った箇所のスベスベ感が増したように感じられた。

「はう、うん、ああ、やだ、普通にオッパイ揉まれるのとは違って、あんッ、変な感じだわ。いつもは谷間を重点的に触られること、ないからかしら？」

「ママのオッパイ、大きいから、凄く塗り応えがあるよ」

義母が悩ましく腰をくねらせている様子が、たまらなくセクシーであり、巨の性感を一層揺さぶってくる。いつまでも乳房にローションを塗る作業をつづけていたい思がある反面、急速に迫りあがる射精衝動に危機感を覚える。

豊満な乳房団から右手を抜いた巨は、今度は右手を左乳房の外側に這わせ、左手を谷間に挟みこんだ。右と同じように左乳房の内側にもローションを塗りこんでいく。

「塗り、終わったよ」

しばらくして、左手も谷間から抜き取った。乳房の内側が、うっすらと光沢を放っている。その光景の艶めかしさに、ウットリとした眼差しを向けてしまう。

「ありがとう。じゃあ、今度はママの番ね。このオッパイを使って、巨の逞しいオチンチン、気持ちよくしてあげるわ」

両手を双乳の外側に這わせグッと真ん中に寄せ、深い谷間を強調した義母が、しゃがみこんできた。すぐさま右手を膨らみから離し、天を衝く勢いでそそり立つ強張りへのばすと、肉竿の中央をやんわりと握りこんでくる。

「くはッ、ぐっ、ああ、マ、ママ……」

脳天に突き抜ける鋭い愉悅に、腰が切なそうにくねってしまふ。ジュツと先走り液

が溢れ返り、鼻を突く牡臭が濃くなったように感じられた。

「はぁん、とつても硬くて、熱くて、本当に素敵よ」

義母の声にも甘さが増し、その声音の変化だけでも、射精感が上昇してきてしまう。尻穴を窄めることよって、なんとか上昇速度を鈍化させる。蕩けそうな眼差しで下腹部に目を落とすと、肉竿の中央を握った玲奈がペニスを押しさげようとしていた。

「ママ、は、早くしてくれないと、僕、すぐにも出ちゃいそうだよ」

「もう出ちゃうの？ 朝もあんなにいっぱい、ママのお口に出したくせに」

「だって、オッパイで挟んでもらえると思ったら、それだけで……」

亘は腰をもじつかせながら、必死に快感と戦っていた。その様子にクスッと小さく微笑んだ若母が、押しさげた亀頭の先端を豊かな乳房へと誘ってくる。

(いよいよだ。硬くなったチンチンを、ママのオッパイに挟んでもらえるんだ)

運命の瞬間を見逃すまいと、亘はじつと口のペニスを注視しつづけていた。だが、意に反して玲奈は、いきなり谷間に硬直を導いてはくれなかった。左手を右乳房の下弦に這わせ、ずっしりとした量感の膨らみを持ちあげると、右の膨らみの頂上に鎮座しているバージンピンクの乳首に向かって、亀頭を近づけてきたのだ。

「あんっ」

「ぐふおッ、あう、くつ、ママ、な、なにを」

敏感な亀頭の裏側に、コリッとした感触が襲いかかってきた瞬間、巨は白目を剥きそうになった。腰には雷に打たれたような痙攣が走り抜けていく。

「うんッ、巨のオチンチンの先っぽと、ママの乳首が、はう、キスしてるのよ」

玲奈も感じているのか、腰を艶めかしくくねらせている。若母の乳首が敏感なことは、口を含むといつも甘いうめきを漏らしていたことから明らかだ。そのため、充血した亀頭との接触は、美母自身にとつてもたまらない心地に違いない。

だが、巨の悦びと興奮はそれ以上だ。亀頭裏が乳頭でこすりあげられるたびに、背筋には快感の電流が駆け巡り、断続的にペニスが跳ねあがってしまう。鈴口からはネットリとした粘液が溢れ返り、バージンピンクの乳首が卑猥な光沢に包まれていく。

「うかあ、くうう、ママ、ダメだよ、ほんとに僕」

両手を美母の両肩に載せ、快感の鋭さを伝えるように、柔肌に指を食いこませる。

「気持ちいいのね。ママも、巨のパンパンに張った亀頭で、乳首グイグイされると、あんっ、たまらなく気持ちいいの。今度は反対の乳首も、気持ちよくして」

類い稀な美貌に、それまで目にしたことのない妖艶さを滲ませた玲奈は、鼻にかかった甘い声で囁くと、ペニスを右乳房から左乳房へと移動させてきた。すぐさま左の

ポッチのコリツとした感触が、襲いかかってくる。

「うかう、ほんとに、僕、もう、出ちやい、そう……」

脳内で悦楽の花火が断続的に打ちあげられ、煮えたぎったマグマがグツグツと音を立てながら輸精管に向かって行進速度をあげていた。

「もう少し我慢して。ローションを塗った谷間に、まだ挟んでないのよ」

「そんなこと、言われたって、ぐふッ」

いつにも増して積極的な玲奈の奉仕に、亘は奥歯を噛み締めていた。その間にも若母の手に握られたペニスの先端が、卑猥な照りを放つ乳頭でこすりあげられ、球状に硬化した突起によって鈴口が押し広げられそうになる。

「早く、挟んでよ、ママ！　じゃないと、ぼつくうう……」

義母の肩を掴む両手に一層の力がこめられていく。透明感溢れる雪肌を、指の跡が残ってしまうほどだ。

「あんツ、亘、そんなに強く肩、掴まないで、痛いわ」

「ごめん、ママ、だけど、ほんとに」

「分かったわ。じゃあ、今度はちゃんと、挟んであげる」

玲奈はそう言うと、今度こそ本当に、ローションによって艶めいた光沢を放ってい

る胸の谷間へと硬直を導き入れてくれた。

「うわっ、ああ、ママのオッパイにほんとに僕のが……」

ぱふっ、とHカップの深い谷間にペニスが埋没した瞬間、亘は軽い立ち眩みに襲われた。柔らかさと弾力がほどよくミックスされた乳肉が、いきり立つ強張りを完全に呑みこんでいる。

それは初めての気持ちよさであり、ボリユーム満点の双乳で優しく包みこまれていくだけで、夢幻の境地に旅立てそうだ。

「どう、亘、ママのオッパイは、気持ちいいかしら」

「うん、気持ちいいなんてもんじゃないよ。温かくて柔らかい、大きなオッパイの布団に守られているみたいだ」

「ふふふっ、よかったわ。じゃあ、いっぱい気持ちよくなって、いっぱい出してね」

悩ましく目元を染めた玲奈は、両手をたわわな膨らみの外側にあてがうと、真ん中に乳房を押し寄せてきた。ただでさえ、すっぼりと包み隠されていたペニスが、さらに豊乳の谷間深くに押しこめられていく。

「おわっ、す、凄い。凄すぎるよ、ママのオッパイ」

「まだまだ、これからが本番よ」

艶っぽく微笑んだ義母は、左右の乳房の外側に這わせた両手を、互い違いに上下させはじめた。位相をズラすように揉みこまれた双乳で、ペニスがこすりあげられるクチュツ、ヌヂュツと粘ついた摩擦音が湧き起り、陰囊が震えあがっていく。

「うはッ、くつ。こ、こんなに、気持ちいいなんて、おぉお……」

先ほど塗ったローションの影響もあるのだろう。なめらかな乳肌にはペニスが扱かれると、天にも昇る気持ちよさが全身を駆け巡った。志乃とのセックスで味わった膣壁の蠢きとはまったく別種の悦楽に、脳が蕩けだしてしまいそうだ。

「あぁん、ママもよ。硬いオチンチンでオッパイをこすられるのが、こんなに気持ちいいなんて、知らなかったわ。もつと、もつといっぱいよくなってちょうだい」

普段の伶俐さからは想像ができない淫蕩さを浮かべ、位相ズラしのスピードをあげてきた。クチュツ、ぐぢゅつ、ヌヂュ……。摩擦の淫音がさらに大きく耳を打つ。

ペニスには断続的な痙攣が起り、溢れ出した先走り液が乳房の谷間を濡らしていく。扱きあげの速度をあげた結果、乳房の振れ幅も大きくなり、それまでまったく姿を見せなかった亀頭が、深い谷間の底から、ピョコつと見え隠れするようになった。

（こんなに気持ちいいなんて……。ママのオッパイ、もつと感じていたいけど……）

破裂寸前にまで膨張した亀頭の先端では鈴口がパカッと口を開き、さらに粘度を増

した先走り液を、若母の胸の谷間に撒き散らしている。同時に、それまで胸の谷間で封印されていた牡臭が立ち昇り、ツンと鼻を突く精臭に脳が揺さぶられる。

「ダメだ、ママ。僕、本当にもう……」

陰囊内部では沸騰したマグマが、噴火口を求めるように暴れまわっていた。睾丸が徐々にずりあがり、気を抜けばその瞬間に爆発してしまいそうだ。

「ふうん、本当に出ちやいそうなのね。巨の元気なオチンチンが、谷間でビクビク震えてるのが分かる。はん、それにこんなエッチな匂いをさせちゃって。ほんと、いけない子なんだから」

ゾクツとするほどの艶かしさで、上目遣いに見つめてきた玲奈は、さらに淫猥な攻撃を仕掛けてきた。クチャッ、チュクツと音を立てて口内に唾液を溜めると、ふっくらとした形のいい朱唇を開いたのだ。トロツとした白い泡状の分泌液がこぼれ落ちてくる。小さな気泡を内包した唾液は、細い糸を引くように垂れ、胸の谷間から顔を覗かせていた亀頭の先端に落ちた。

「うかあッ、はう、うおおおお」

生温かな唾液が開かれた鈴口に垂れ落ち、体内に染みこんでくる。

「はあん、もつとよ、もつと気持ちよくしてあげる」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!